歌声は闘いと共に

12月6日から日本のうたごえ

市体育会館での九州のうたごえ

一九五八年日本のうたごえ祭典は十二月六、七、八の三日間東京で開かれる。今年はとくに(1)新しい戦争の危険と日本の核武装に反対する(2)アジアの平和と友好、とくに中国との国交回復をかちとる(3)全国民の自由と民主主義を守る闘いを進める。の三つのテーマを柱として祭典の全部が企画され、スローガン「うたごえは平和の力」を中心に〃うたは闘いとともに〃世界の友と手をつなごう〃〃声高く〃〃この声きけ〃を全国民のものに〃の三つにきまった。

【一】出演の組合せ

十二月七日　1、産業別出演団体　炭鉱、教員、紙パ、全繊労、鉄鋼、造船、専売、全林野、金融、金属、私鉄、全国瓦斯、自治労、印刷出版、農業団体、全海運、全繊維、全医労、学生

2、地方別出演団体　関東、東海、北信越、北海道、中国、四国

3、その他　アコーデオン班、高校生、基地農民

十二月八日

1、産業別出演団体　国鉄、全逓、全鉱、電機労連、国家公務員、電通、都市交通、全日通、電力、化学、新聞、放送、全官僚、保母

2、地方別出演団体　東京、関西、東北、九州

3、その他　主婦、子供、少年班、基地農民

【二】日本のうたごえ祭典日程

十二月六日（土）　創作発表会　国鉄労働会館　コンクール形式による合唱発表会

十二月七日（日）　農林のうたごえ　砂防会館　東京都体育館　大音楽会

十二月八日（月）　大音楽会　東京都体育館

十二月九日（火）　日本のうたごえ総会　場所未定

慰安會に感慨深し

合同労組にこの実り

大牟田地区合同労働組合（略称＝合同労組）主催の〃組合創立三周年記念、組合員とその家族慰安会〃は、さる十七日午後五時から市民館ホールでひらかれた。

この日の参加人員は二・四〇〇名以上をかぞえ、立錐の余地のないにぎわいを呈し、舞台に展開する各種演芸にはよろこびと満足の拍手を贈っていた。

組合の創立以来過去三年間、それは大企業の各労働者からすれば想像もおよばない苦汁に満ちた歩みだっただけに、同労組の組合員誰もの胸のなかには「合同労組がよくぞこれまで……」との感慨がわいたことだろう。

いま、同労組のたどった三年の足跡をふりかえればほぼ次のとおりである。

合同労組三年の歩み

中小企業労働組合の運動は、松屋従組のストライキ以降八年にわたり多くの中小企業労組が誕生しながらも、その寿命は短く常に一進一退の状態にあった。実際に当時より残っているものは数組合にすぎない状態である。その大きな原因は、中小企業労組の維持発展には多くの活動家を必要とすること、その支払い犠牲があまりにも大きいこと、および会社が積極的に切り崩しを行った場合、組合員の抵抗力が非常に弱いことにあった。

こうした中小企業労働者の弱さを克服すること、組合の御用化を防ぐこと、企業別組合の発展はすべに大きな障壁に打ちあたることなどを打解するため、三年前これらの難点を克服し、中小企業労働者の連帯性を強化するため大地評の指導により地域合同労組を結成する準備が整えられたものである。

合同労組は当初、二企業と三団体の従業員七十余名が集り、個人加盟方式で結成された。しかもそれぞれの職場の全従業員でなく、その半数内外くらいの者で結成されたところに、はじめからその特性をもっていた。

さらに二年目に至って九企業三団体二〇〇余名に発展し活動家の不足、経費不足など多くの難問題を克服しながら三年目には現在二十一企業三団体四三〇名となったものである。

この間、主なる闘争の特徴としては経済闘争に必ず封建性打破闘争を併用して経済条件の向上と同時に隷制を打破して職場闘争の基礎をつくり組合員としての誇りを保持し職場を明朗化したことである。解雇反対闘争にたいしては一人の解雇も認めないという方針をもって組織されている合同労組の場合、闘争は三年間連続不断の状態であったが、そのなかでも顕著なものをあげれば、

一、昭和三十一年春の大牟田青果市場の賃上げおよび解雇撤回闘争は四月二十六日より八月四日の間にわたり、実力行使八日間マイクによる顧客および対外者宣伝十日間、職場闘争三カ月という記録的なものであり、一率二千円の賃上げと二十日分の越冬手当を同時に獲得した。

しかも解雇撤回闘争は職場闘争法廷闘争を併用し、翌三月にまでおよび、個人の都合で約三十万円の退職金支給を条件に妥結せざるを得なかったが、その後における会社の労務政策は大いに改善されている。

二、昭和三十二年七月の大牟田運送株式会社の争議は極端な会社側の労務員軽視という職場状態のなかで実力行使に発展したものであり、約二週間にわたる実力行使と職制打破、寄生的軍役の退陣、はじめての越冬手当三・〇〇〇円の獲得により一応の終止符をうったが、ひきつづき五カ月間にわたる職場闘争のなかで一五・〇〇〇円の最低保障給を獲得した。

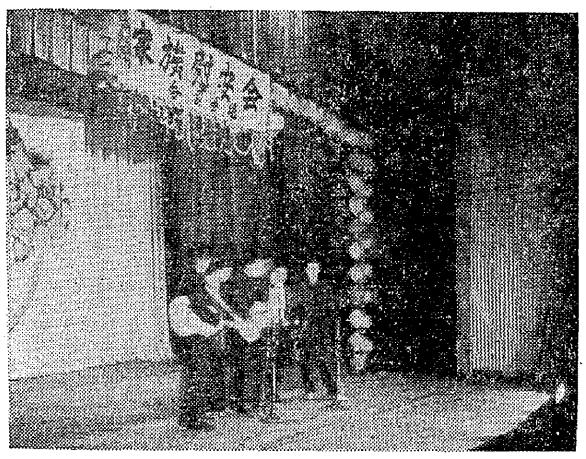
以上は一、二の顕著な闘争の例をあげたがこのような長期且つしつこいような闘争が三十一年一件、三十二年二件、三十三年十件と年々増加の一途をたどっており、会社側の意図も相当なものが多くなっている。中小企業としては前例のない法廷闘争、地労委提訴闘争などを交え仮令の組合員が個人の都合により解雇を認めた場合も前例のない多額の退職金を確保してきたまた日常闘争のなかでは常に職場交流による企業別意識の排除に努力し会議、集会などにたいする組合員の集合状態が無休日営業、深夜営業が多いにもかかわらず、漸次向上してきつつある。

しかしながら過去三年間、比較的順況にあり脱落者のなかった合同労組の組織もさいきん日経連よりの分裂宣伝と対組合闘争指導の強化されるに従い、重富印刷に脱退者を生じ、渡瀬鉄工所に分裂、工場閉鎖、馬田タクシーに極端な組合員買収による分裂策動があらわれるなど組織防衛面で計画的な日常闘争が必要となってきた。

この現状のなかで組合の方針もすべての闘争のなかに、組織防衛対策および組織にたいする信頼感をつくりあげること、地域分会と家族にたいする教宣および家族組合の育成に努めるとともに地域を基盤として企業別意識のない組合への転換期にのぞみつつある。

十一月十七日の三周年記念家族慰安会はこうした多面の目的をもって行われたものである。

以上、三年間の歩みのなかで組織拡大闘争と組織防衛闘争を両輪として全大牟田の中小労働者を一体とする組織確立のための基盤をつくりつつあるのが合同労組の現状である。



合同労組もこんなに成長した。創立三周年を祝う組合員と家族は苦しかつた闘いを振り返り感慨無量であつた。

日本のうたごえについて

センター　荒木　榮

日本のうたごえは合唱コンクールではありません。

労働者を中心とする働らく人たちが、苦しい生活の現実と取り組み、新しい文化を創り出そうと努力してきたことを交流し、その中から新しい発展の方向を目指して進もうという非常に重要な内容をもっています。

マンボ、チャツチャツチャ、ロカビリーなど、多くの青年男女の心をむしばんでいます。

だから政府は道徳教育が必要だといいます。彼らのいう道徳教育とは、国民を軍国主義的な思想にすることです。若が代を小学校の教課の中に復活したのはそのいい例です。

文化が情操を高め、また思想的にも高めていく上で非常に大きな役割を果していくことができるのですが、今はそれが全く逆に使われていると思います。

このような中で開かれる日本のうたごえは、今の反動的文教政策を拒否し、平和で建設的な文化を創造しようとする闘いであると思います。

警職法改悪反対のうた

◈「俺は労働者」の節で

1 警職法が出て来たホイ
突如と出て来たホイ
それは何だ何だホイ
それは労働者を弾圧するため
ホーイ　ホイ　ホイ　ホイ
それみんなよってつぶそう
警職法をつぶそう

2 アメ公がどなればホイ
岸が「ハイ」と云つたホイ
それが警職法だホイ
それは日本の原爆基地化だ
ホーイ　ホイ　ホイ　ホイ
それドンと闘おう
警職法をつぶそう

3 国中がまとまろうホイ
戦争は真平だホイ
ほんにそうだそうだホイ
おらの日本だおらの力で
ホーイ　ホイ　ホイ　ホイ
それみんなよって築こう！
平和な日本!!

映画

大地評推薦

戦争への憎しみ・主題と表現の見事な一体化

戦争と貞操

モスクワの夜明け――。人つ気のない広い通り、橋のたもとで二人の男女が恋によっている。女の名はウエロニーカ、男の名はボリスという。だが突如として起つた独ソ戦争が二人の間を引き裂いてしまつた。

祖国に忠実なボリスはウエロニーカの願いもきかず、両親にも無断で志願してしまつたのである。ウエロニーカはひたすらボリスからの便りを待つが一向に送られてこない。そのうえ空襲の夜ボリスのいとこマルクに犯され、むりに結婚させられてしまう。

こうして彼女は愛してもいない男と結婚する羽目になる。すべて戦争の勃発、恋人の出征、空襲による両親の死という悪夢のような事件のためである。恋人への愛切りが彼女の良心を苦しめた。結婚後の彼女はまるで屍のような存在となり、ただひたすらにボリスからの便りを待つた。そしてマルクとも別れてしまう。

戦争は終つた。兵士たちが帰つてきた。花束をかかえてウエロニーカもやつて来た。そして知つたことは、ボリスが死んだことだつた。

よろこびにわきたつ群衆の中に悲しみと絶望にうちひしがれたウエロニーカがいる。苛酷な運命を甘受し、ようやく祖国とともに生きようとした彼女が空を見上げると、かつてボリスとの逢びきの夜桃めたあの鶴が、列をなして飛んで行く姿が桃められた。

ラストシーンが暗示しているように、これは一つの純愛の記録であり、戦争否定への訴えであり、より多く一人の人間の魂の成長の記録であろうとしているようだ。

一九五八年カンヌ映画祭グラン・プリ受賞作品（二十六日より大牟田名画座で上映、前売券八十円）

こどもページ

＝日本昔ばなし＝

はなのび糸巻

村の長者（ちょうじゃ）にはむすこが一人いました。むすこはばくちがすきで、そのあそびどものために、ふたおやの死に目にもあえないしまつでした。ひとりぼっちになったむすこは、それにもこりず毎日ばくちをつづけ、そして毎日まけつづけたためにとうとうおやがのこしたざいさんぜんぶをなくしてしまいました。「もうとても、銭もって門に立って食わんことには、どうもならん」

とむすこはものごいをしてくにぐにを歩いていました。ところがある日、草ぶかいおどうのそばで日がくれましたので、むすこは「仏さま、仏さま、こんや一ばんだけ、わしを泊めてください」とそのおどうに泊りました。おどうのあみださまの前にはさいせんがつんでありました。むすこはそれに目をつけると、

「仏さま、仏さま、二人でばくちをしましょう。一円だけかしてくれやれ」

といって、あみださまをあいてにばくちをはじめました。

「そら、わたしが勝ちもうしたからいただきますぞ」

「こんどは二円もうけもうした」

「すっかりとってしもうた。かりた一円は返しもうしますぞ」

「また勝った」

そういってさいせんのぜんぶをふところにしてお堂をでていこうとしたところが、うしろから

「おいおい」

という声がしました。

「はい、何でござる」

「さいせんをもっていかれてはかなわんでのう。ついてはこの糸巻きをくれるから、金をかえしてくれんかい」

「いとまき？」

「そうじゃ、この糸巻は男にならず、女にならず、金持ちのはなを〃はなでー、はなでー〃というてふところで糸を十ひろはなせば十ひろ高こうなる。また〃はなひつこめー、はなひつこめー〃ちゆうて糸をまけば、もとのようにはなが短くなる」

「よか、よか」

むすこは、金をかえして糸巻をふところに入れたびにでました。しばらくいくと、りっぱなくらをもった家の三がいのまどから、うつくしい娘がそとをながめているのをみつけました。さっそく

「はなでー　はなでー」

とふところの糸をはなしたところが、娘のはなが四ひろのびました。娘はびっくりして倒れてしまいました。そして大さわぎになりました。

そのばん、むすこはそしらぬかおで、かねもちの家のあたりをうろついて、

「どうかしたんですか」

とききました。

「一人娘のはなが急にのびたのだが、なおす人がおらん」

というので、

「わしは引つこましたことはあるが」

というとさっそくさしきによびあげられました。むすこは娘のねどこのまわりにびょうぶをたてまわすと、

「のん、のん、のん」といのるまねをして、

「はなひつこめ、はなひつこめ」

と糸をまきました。すると、だんだんはながちぢんで、もとどおりになりました。娘のおやはたいそうよろこんで、

「ぜひ、あとをとりになってくれ」

とたのみましたので、むすこになりました。

ところが、あとになって

「おれはばなをいくらでものばせる」

とじまんしたものですから、みんなは「のばしてみい」といいました。むすこはおだてにのってのばしますと、とおくテンジクまでのびました。だがちょうどテンジクにかじがあつたので、やけどをしあわててちぢめたところが、むすこはばなしになつたということです。